



LIBER STUDIORUM

寺田寅彦

LIBER STUDIORUM

一

震災後復興の第一歩として行なわれた浅草凌雲閣の爆破を見物に行った。工兵が数人かかって塔のねもとにコツコツ穴をうがっていた。その穴に爆薬を仕掛けて一度に倒壊させるのであったが、倒れる方向を定めるために、その倒そうとする方向の側面に穴の数を多くしていた。準備が整って予定の時刻が迫ると、見物人らは一定の距

離に画した非常線の外まで退去を命ぜられたので、自分
らも花屋敷の鉄檻てつおりの裏手の焼け跡へ行つて、合図のラッ
パの鳴るのを待っていた。その時、一匹の小さなのら犬
がトボトボと、人間には許されぬ警戒線を越えて、今に
も倒壊する塔のほうへ、そんなことも知らずにうそうそ
ひもじそうに焼け跡の土をかぎながら近寄つて行くのが
見えた。

ぱつと塔のねもとからまっかな雲が八方にほとばしり
わき上がったと思うと、塔の十二階は三四片に折れ曲が
った折れ線になり、次の瞬間には粉々にもみ砕かれたよ

うになって、そうして目に見えぬ漏斗から紅殻色べんがらいろの灰でも落とすようにずるずると直下に堆積たいせきした。

ステッキを倒すように倒れるものと皆そう考えていたのであった。

塔の一方の壁がサーベルを立てたような形になつてくずれ残ったのを、もう一度の弱い爆発できれいにもみ砕いてしまった。

爆破という言葉はどうしてもあのこわれ方にはふさわしくない。今まで堅い岩でできていたものが、突然土か灰か落雁らくがんのようなものになつてそのままでするすると

たれ落ちたとしか思われぬ。それでもねもとのダイナマイトの付近だけはたしかに爆裂するので、二三百メートルの距離までも豌豆えんどうだい大の煉瓦れんがの破片が一つ二つ飛んで来て石垣にぶつかったのを見た。

爆破の瞬間に四方にはい出したあのまっかな雲は実に珍しいながめであった。紅毛の唐獅子からじしが百匹も一度におり出すようであった。

くずれ終わると見物人は一度に押し寄せたが、酔狂な二三の人は先を争って砕けた煉瓦の山の頂上へ駆け上がった。中にはバンザイと叫んだのもいたように記

憶する。明治煉瓦時代の最後の守りのように踏みとどまっていた巨人が立ち腹を切って倒れた、その後に来るものは鉄筋コンクリートの時代であり、ジャズ、トーキー、プロ文学の時代である。

あの時に塔のほうへ近づいて行ったあの小犬はどうしたか。当時を思い出すたびに考えてみるのだが、これはだれに聞いても到底わかりそうもない。

こんな哀れな存在もあるのである。

二

ある日乗り合わせた丸の内の電車で、向かい側に腰をかけた中年の男女二人連れがあった。男は洋服を着た魚屋さんともいった風体ふうていであり、女はその近所の八百屋のおかみさんとも思われる人がらであった。しかるに二人の話し合っている姿態から顔の表情に至っては全く日本人離れがしている。周囲のおおぜいの乗客はたった今墓場から出て来たような表情であるのに、この二人だけは実に生き生きとしてさも愉快そうに応答している。

それが夫婦でもなくもちろん情人でもなく、きわめて平凡なるビジネスだけの関係らしく見えていて、そうしてそれがアメリカの魚屋さんとアメリカの八百屋さんのように見えるのが不思議である。

二人ともにあるいは昔からの活動写真、近ごろの発声映画のファンでもあるかとも考えてみた。そうとでも仮定しなければ他に説明のしかたのないほどに、あく抜きのしたヤンキータイプを見せていた。

喫茶店などで見受ける若い男女に活動仕込みの表情姿態を見るのは怪しむまでもないが、これが四十前後の堅

気な男女にまで波及して来たのだとすると、これはかなり容易ならぬ事かもしれぬ。

天^{とう}平時代の日本の都の男女はやはりこういうふうにして唐^{とう}や新羅^{しんら}のタイプに化して行ったのかもしれない。

三

書店の二階の食堂で昼飯を食いながら、窓ガラス越しに秋晴れの空をながめていた。遠くの大きな銀行ビルディングの屋上に若い男が二人、昼休みと見えてブラブラ

している。その一人はワイシャツ一つになって体操をしてみたり、駆け足のまねをしてみたり、ピッチャーの様子をしたりしている。もう一人は悠然^{ゆうぜん}としてズボンのか^{ちようしよう}くしに手を入れ空を仰いで長嘯漫歩しているふぜいである。空はまっさおに、ビルディングの壁面はあたたかい黄土色に輝いている。

こういう光景は十年前にはおそらく見られないものであつたらう。この二人はやはり時代を代表している。ジャズのはやるゆえんである。

四

一週に一度永代橋えいたいばしを渡って往復する。橋の中ほどから西寄りの所で電車の座席から西北を見ると、河岸かしに迫って無骨な巖がん丈じょうな倉庫がそびえて、その上からこの重い橋をつるした鉄の帯がゆるやかな曲線を描いてたれ下がっている。この景色がまたなく美しい。線の細かい広重ひろしげの隅田川はもう消えてしまった代わりに、鉄とコンクリートの新しい隅田川が出現した。そうしてそれが昔とはちがった新しい美しさを見せているのである。少し霧の

かかった日はいつそう美しい。

邦楽座ほうがくざわきの橋の上から数寄屋橋すきやばしのほうを、晴れた日

暮れ少し前の光線で見えた景色もかなり美しいものの一
つである。川の両岸に錯雑した建物のコンクリートの面
に夕日の当たった部分はずいぶんあたたかいよい色をしてい
るし、日陰の部分はコバルトから紫まであらゆる段階の
色彩の変化を見せている。それにちりばめた宝石のよう
に白熱燈や紅青紫のネオン燈がともり始める。

白木屋しろきやで七階食堂の西向きの窓から大手町のほうをな
がめた朝の景色も珍しい。水平に一線を画した高架線路

の上を省線電車が走り、時に機関車がまっ白な蒸気を吐いて通る。それと直交し弓なりに立って見える呉服橋通りの道路を、緑色の電車のほかに、白、赤、青、緑のバスが奇妙な甲虫コレオプテラのようにはい上りはいおり行きちがつている。遠くにはお城の角櫓すみやぐらが見え、その向こうには大内山おおうちやまの木立ちが地平線を柔らかにぼかしている。左のほうには小豆色あずきいろの東京駅が横たわり、そのはずれに黄金こがね色の富士が見える。その二つの中間には新議会の塔がそびえている。昔はなかったながめである。百年前に眠ったまま眠り通し、そうして今この窓で目ざめたとした

ら……。いつもこんなことを考えながら一杯のコーヒ―をすするのである。

震災前の東京は、高い所から見おろすと、ただ一面に鈍い鉛のような灰色の屋根の海であった。それが、震災後はいったいにあたたかい明るい愉快な色の調子が勝つて来た。それと同時にそういう所で仰ぎ見る空の色が以前よりも深く青く見えだしたような気がする。これはコントラストのせいであろう。これほど著しい色彩の変化が都人の心に何かの影響を及ぼさないはずはないという気がする。

実際は東京の空気は年々に濁るはずである。自動車のガソリンの煙だけでも霧の凝縮核を供給することはたいしたものである。寒い曇天無風の夜九段坂上から下町を見るといわゆるロンドンフォッグを思わせるものがある。これも市民のモラルを支配しないわけにはゆかないであろう。

五

上野のデパートメントストアの前を通ったら広小路側

の舗道に幕を張り回して、中に人形が動いていた。周囲に往来の人だかりのするのを巡査が制していた。なんとなく直感的にその幕の中には人が死んでいそうな気がしたが、夕刊を見るとやっぱり飛び降り自殺であった。あまり珍しくないそれであった。

それから数日後にまた同じ屋上庭園から今度は少しばかり前とちがって建物の反対側へ飛んだ女があった。そうして庭園はついに閉鎖された。

また数日たって某大学の構内を通ったら壮麗な図書館の屋上に立ってただ一人玄関前の噴水池を見おろしてい

る人がある。学生であるか巡視であるか遠いのでよくわからなかったが、少し変な気持ちがあった。その後さらに数日たって後、同じ大学の中央にそびえた講堂の三階から飛んだ学生があったという夕刊記事を読んで、また変な気持ちがあった。この終わりの自殺者と、前の図書館屋上の人とはおそらくなんの関係もないかもしれないが、しかし自分の頭の中では前後四人の「屋上の人」がちやんと一つの鎖でつながれている。

臆病者の常として自分もしばしば高い所から飛びおりることを想像してみることもある。乾坤一擲けんこんいつてきという言葉

はこんな場合に使ってはいけないだろうが、自分にはそういう言葉が適切に思い出される。飛びおりてしまえば自分にはその建物もその所有者も、国土も宇宙も何もかも一ぺんに永久に無くなるのだから、飛ぶ場所の適否の問題も何もないのであるが、他の人にはやっぱり世界は残存しその建物と事件の記憶は残るであろう。

また数日たって後の雪のふる日、ある婦人がその飼っていた十姉妹じゅうしまつの四羽とも一度に死にかかったのを手のひらへのせて一生懸命火鉢で暖めていた。見ると、もう全く冷たくなってしまっている。しかし、「たとえだめで

もそうしないと気がすまない」のだという。「人間が死んだらお経をあげると同じじやありませんか」とその人はいう。

こういう唯心論者もまだ少しはいるのである。

六

ある大学講堂の前へ突き当たって右の坂道へおりようとすする曲がり角かどに、パレットナイフのような形の芝生がある。きちょうめんにちやんと曲がり角を曲がってある

くのと、その芝生の上を踏みにじって行くのとで、歩く距離にすれば三尺とはちがわない。しかし多くの人がその三尺の距離の歩行を節約すると見えて芝生がそこだけ踏みつぶされてかわいそうにはげている。この事を人に話したら、それは設計が悪いのだという。そんな所へ芝生をこしらえるのが間違っていると言われてなるほどそれもそうかと思った。

上野の竹の台の入り口に二つ並んで噴水ができた。その周囲の芝生に立ち入るなど書いた明白な立て札はあるが、事實は子供も大供も中供もやはり芝生に立ち入って

水の面をのぞかなければ気が済まないのである。これもたしかに設計が悪いと言われなければならないのがいわゆる時代の推移であろう。二十年前だったら、設計も立て札も当然自明的であって、制札を無視するのが没公徳的で悪いのであった。

自分の郷里では、今は知らず二十年も以前は、婚礼の三々九度の杯をあげている座敷へ、だれでもかまわず、ドヤドヤと上がり込んで、片手には泥だらけの下駄をぶら下げたまま、立ちはだかって花嫁や花婿の鼻の高低目じりの角度を品評した。それを制すれば門の扉の一枚

ぐらい毀こぼたれても苦情は言えなかつた。これはむしろ一九三〇年を通り越していたとも考えられる。

今度法令が変わると他人の家へうっかり黙ってはいつて来るものにはピストルを向けてぶっ放してもいいことになるという話である。これは芝生の場合とは逆の方向への推移である。もっともアフリカ内地へでも行けば、今でも、うっかり国境へ入り込んで視察でもしていたというだけでもすぐ拘禁され、場合によると命があぶない所もあるかもしれぬ。

これらの事実の關係ははなはだ錯綜さくそうしていて、考えて

も考えても、考えが隠れん坊をして結局わからなくなるのである。時代は進むばかりであとへはもどらないはずであるが、時代の波の位相フェーズのようなものはほぼ同じことを繰り返すのかもしれない。しかしただ繰り返すだけではなくて、やはり何かしらあるものの積分だけは蓄積しているには相違ない。そうしてその積分されたものの掛け値なしの正味はと言えば結局科学の収穫はやりものだけではないかという気がする。思想や知恵などという流行物はどうもいつも一方だけへ進んでいるとは思われない。

七

妙な夢を見た。大河の岸に建った家の楼上にいる。どういうわけかはわからないが、この自分はもう数分の後には、別室に入って、自分からは希望しない自殺を決行しなければならぬことになっている。その座敷というのがこつちからよく見える。大きな川に臨んだ見晴らしのいいきれいな部屋で、川向こうに見える山は郷里の記憶に親しいあの山である。だれとも知れず四五人の人々がそばにいておし黙っている。五分、三分、一分いよい

よ時刻が迫ったのでずっと席を立ってその別室へはいった。その時までには死ぬことに対しては全く平気でいたのが、そこへすわった瞬間に急に死ぬのがいやになった。それはちようど大河の堤を切り放したように、生命への欲望が一度に汎濫はんらんした。と思うと大きな恐ろしいうなり声のようなものが聞こえて目をさました。

二三日前にある友人とガリレーやブルノやデカルトの話をした。そうして、学説と生命とを天秤てんびんにかけて三人が三様の解決を論じた。その時に頭を往来した重苦しい雲のようなものの中に何かしらこういう夢を見させるも

のがあったかもしれない。

ブルノは学問と宗教と生命とを切り離す事ができなかつた。デカルトではこれがデイフェレンシエート分化されていたように見える。ガリレーはその二人の途中に立って悩んでいたのである。

この夢を見た夜は寝しなにしよくにほんぎ続日本紀を読んだ。そうしてたちばなのな橘らまろ奈良麻呂らの事件にひどく神経を刺激された、そのせいもいくらかあったかもしれない。臆病者はよくこんな夢を見る。

(昭和五年三月、改造)

日本文学電子図書館

LIBER STUDIORUM

著 者 寺田寅彦

作成者 宮澤一郎

底 本 寺田寅彦随筆集 第二卷
岩波文庫、岩波書店

1991年4月5日 第59刷発行



日本文学電子図書館